

東日本大震災後3年目の平和心理学の課題と実践

平和心理学を創る (3)

企 画 :	いとうたけひこ (和光大学)
	杉田明宏 (大東文化大学)
司 会 :	杉田明宏 (大東文化大学)
話題提供 :	井上孝代 (明治学院大学)
	五十嵐靖博 (山野美容芸術短期大学)
	伊藤哲司 (茨城大学)
	いとうたけひこ (和光大学)
指定討論 :	平沼博将 (大阪電気通信大学)

【企画主旨】

東日本大震災後3年が過ぎた時点に立つて、この問題に対してなされてきた多様な心理学的な実践と研究活動を検証しながら、コンフリクト・暴力・平和といった平和心理学の観点から見た課題を考察する。今後の理論的・実践的な意義ある研究と実践を共に考えて行きたい。

【報告の概要】

■井上孝代『東北の声』プロジェクトによるコミュニティ再生

「東北の声」プロジェクトは、東日本大震災の被災者に被災体験を証言してもらい、その様子を映像として記録する。自らの被災体験を他者に語るにより、被災者個人の心理的苦痛が緩和されるという効果が期待される。また、記録した映像を、地域毎に編集し、当該地域の被災経験を後世に伝えるための資料としてアーカイブされてきている。被災者の語りや横への広がりや時間的に継承されていくことで、地域において共有されていくことの意味を明らかにし、コミュニティ再生の可能性を探る。

■五十嵐靖博「ディスコース分析の立場からみた福島原発事故」

福島第一原子力発電所事故は放射性物質による広範な汚染を引き起こす大惨事となった。フーコー派ディスコース分析(Parker, 1992, 1994; Willig, 2001)の立場からみると、事故直後から事故の原因(「想定不可能な」自然災害か、対策の不備による人災か)や放射能汚染の程度、その健康への影響(1ミリシーベルトとされる年間許容被曝線量が妥当か否か、いわゆる低線量被曝が重大な健康被害の原因になるかどうか)などをめぐって利害を異にし対立する意見をもつ人々や組織・機関がそれぞれの立場から異なったバージョンの現実を構成し、それによって私たちの主観性が影響を被る事態が明らかになった。3.11以後、原子力発電の安全性や放射能汚染の影響をめぐって様々な立場から各種のメディアを通して流布されたテキストの中で、事故や放射能に関するディスコースが伝達されてきたといえる。こうした視点からディスコース分析が「3.11後の社会」で果たしえる役割を考察したい。

■伊藤哲司「心のケアよりコミュニティ支援を：新たな「安全・安心」を生みだす仕組み」

1995年の阪神・淡路大震災後から、「心のケア」という言葉が広く使われるようになった。しかし、個人の「心」への過度な注目は、常に一定の留保が必要である。個人の「心」も、人間関係やコミュニティなかで生まれ、揺れ動くものだからである。災害やそれによる危機は、個人への衝撃というよりも、むしろ当人を育ててきた人のつながりや周囲の景観などを含む地域社会の災害や危機である。このような視点から、ひいては個人を支えることにもなるコミュニティ支援がクローズアップされる。本報告では、東日本大震災の津波で被災した茨城県東茨城郡大洗町のコミュニティを支援してきた社会的ネットワーク「大洗応援隊！」の取り組みに注目し、学生を含むメンバーたちと地元の人びとが繋がり対話していくことによって、地元商店街等の活性化にどう結実しつつあるのかを考察する。さらにそれが、いかにして震災以前と質的に異なる新たな「安全・安心」を生みださるかを示す。

■いとうたけひこ「東日本大震災の被災小中学生の作文から見た津波被害と原発被害」

小中高生の161編の作文のなかでの願望表現を分析した。原発被害により慣れ親しんだ環境を離れ避難生活をしなければならない現実や家族や友人と離れ離れになり生活をしなければならない現実など、放射能被害がもたらした影響は子どもたちにとって強いストレス要因になっていることが明らかになった。津波被害の子どもたちは被害を過去のものとして受け止めているが、原発被害体験の子どもたちにとって作文生成時点での被害は現在進行形だった。原発被害がGaltungのいう人間の潜在的可能性を以下に外的に損なっているかが明らかになったことを報告する。